

校歌から見る印旛沼と地域の関係

八千代エンジニアリング(株)	正会員	○原	菜花
印旛沼流域水循環健全化会議		古嶋	美文
印旛沼流域水循環健全化会議		小倉	久子
八千代エンジニアリング(株)	正会員	山内	可奈子
八千代エンジニアリング(株)	正会員	岡本	佳子

1. はじめに

千葉県に位置する印旛沼は、流域面積が約541km²、流域人口が約76万人で、その利用形態や水環境は、土地利用の変遷に伴い変化してきた。現在の印旛沼の水質(COD)は、湖沼法による指定湖沼の中でも全国一、二に汚濁の進んだ状態にある。

印旛沼の水環境保全には、住民と行政が一体となり取り組んでいく必要があるものの、現状では流域住民の印旛沼への関心が高いとは言えない。今後、印旛沼における水環境保全活動をさらに活性化させるためには、住民の印旛沼への関心を高めることが重要である。

そこで本研究では、地域に密着した存在で、人生において誰もが関わり、さらに幼少期のアイデンティティ形成にも資する「校歌」に着目し、印旛沼への関心を高めるツールとして校歌が利用可能か検証するために、流域に位置する小中学校の校歌と印旛沼の関係性を明らかにした。

2. 分析方法

印旛沼流域内に位置する小中学校(168校)のうち、校歌の歌詞を入手した151校を対象に、印旛沼を表す歌詞【沼、ぬま、湖、みずうみ、うみ、湖東、湖西、湖北、湖南】(以下、「印旛沼ワード」という。)が含まれているか検索を行い、「印旛沼との地理的關係」及び「印旛沼周辺地域の変遷と学校設立年との関係」について分析を行った。

印旛沼との地理的關係については、印旛沼からの距離を2km、4km、6km、8km、10km、15km、30km圏の7つの距離区分に分け、校歌に印旛沼ワードを含む学校がどの距離区分に位置するか分析を行った。

学校設立年については、「人口増加等により印旛沼の利用形態等の大きな変化が生じた高度経済成長期以前(1955年)」、「北総鉄道北総線が開通しニュータウンが開発された時期(1979年)」及び「北総線が延伸し、印旛日本医大駅が開業した時期(2000年)」を考慮して校歌に印旛沼ワードを含む学校の設立年を整理し、地域の変遷と比較を行った。

3. 結果及び考察

まず、同一距離圏ごとに存在する小中学校のうち、校歌に印旛沼ワードが含まれる学校の割合を整理した(図1及び表1)。

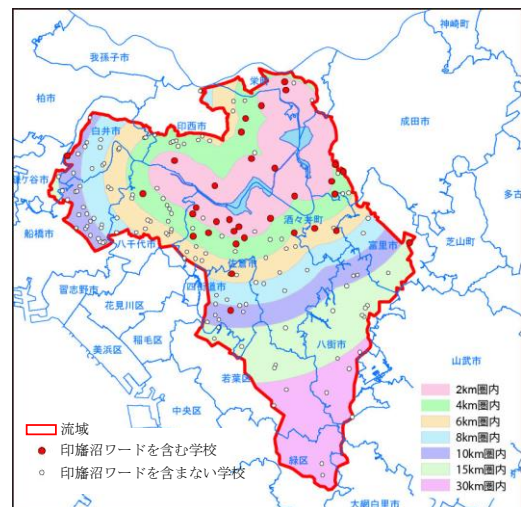


図1 小中学校の分布

表1 距離区分と印旛沼ワードを含む学校数の関係

距離区分	①印旛沼ワードを含む学校数	②総学校数	割合(①/②)
2km圏	16校	19校	84%
4km圏	11校	34校	32%
6km圏	3校	29校	10%
8km圏	0校	21校	0%
10km圏	2校	28校	7%
15km圏	1校	13校	8%
30km圏	0校	7校	0%
合計	33校	151校	22%

これによると、印旛沼ワードが含まれる校歌は印

幡沼から4 km圏内で多かった。「4 km」という範囲は、直視可能な条件下で視認可能距離である限界値の目安である。また、子供の一般的な移動手段である徒歩・自転車で移動可能な範囲である。校歌はしばしば地域環境が歌われることから、印幡沼が身近で地域の象徴となる環境と認識される範囲がこの地域では4 km圏内であると考えられる。

続いて、印幡沼ワードを含む校歌の学校設立年を調べたところ、戦後の高度経済成長期前である1955年以前において、印幡沼ワードを含む学校数が多く、総学校数に対する割合についても約3割となっていた(図2)。それ以降については、印幡沼ワードを含む学校数の割合は約2割以下となっている。これは、高度経済成長により、印幡沼の近隣で営まれていた一次産業従事者が減少し、印幡沼との関わりを持たない住民が増加したことから地域全体で印幡沼への関心が薄れていったためと推察される。

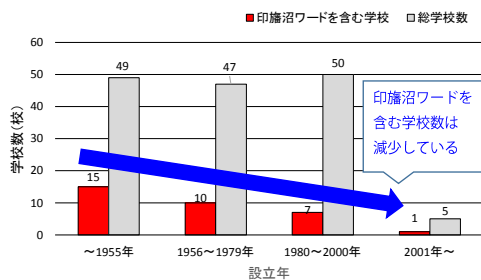


図2 学校設立年と印幡沼ワードを含む学校数の関係

さらに、距離区分と設立年とで印幡沼ワードを含む学校を整理したところ、1980年頃から4 km圏の学校の設立が大幅に減少していた(図3)。印幡沼周辺の地域では、1979年の北総鉄道北総線開通に伴って市街化・宅地化等が進められた。この時期以降、高層住宅の建設等により学校からの視線がさげられ、印幡沼の利用範囲や視認可能範囲が狭まったことが考えられる。

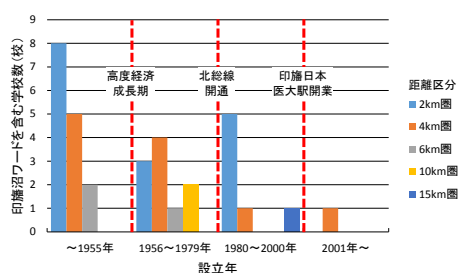


図3 距離区分と学校設立年との関係

また、印幡沼は、市街化等による生活排水の流入増加を発端に、水質の悪化が顕著な状態となった。

この状態に対して様々な取組がなされたことにより、一時よりは流入汚濁負荷量は減少したものの、2007年に水質(COD)がワースト1となり、現在でも全国ワーストの上位を占める水質となっている。

水質悪化が問題となった印幡沼は、漁業の営みや景観の美しさは維持されながらも、地域の象徴する環境といった認識が希薄となり、校歌に歌われることも少なくなったことが示唆された。

5. おわりに

校歌は継承すべき普遍性のある地域の象徴的環境が抽出され、簡潔に表現されているものである。かつての印幡沼も普遍性のある象徴的環境として認識されていたことから、多くの学校で校歌に歌い込まれていた。しかし、現在は直接的な利用頻度の減少や水質の悪化等によりその象徴性は失われつつあり、住民の印幡沼への関心が希薄となっていることが、校歌と印幡沼の関係性を明らかにすることで確認された。

一方で印幡沼ワードを含む校歌は、象徴的環境であった、かつての印幡沼の情景を誰もが思い浮かべられ、イメージを共有することのできるものである。今後、住民の印幡沼への関心を高めるためにはこのイメージの共有が重要であり、校歌がその役割の一端を担う可能性が考えられる。

謝辞

本研究では、校歌の歌詞を各学校から提供していただきました。感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 印幡沼流域水循環健全化会議，千葉県：印幡沼流域水循環健全化調査研究報告 第2号「印幡沼物語」，2014。
- 2) 印幡沼流域水循環健全化会議：印幡沼・流域再生 恵みの沼をふたたび 印幡沼流域水循環健全化計画，2017。
- 3) 月原敏博，大須賀千草：校歌で何を歌うか？—福井県内小学校の校歌と地域環境—：福井大学教育地域科学部紀要(社会科学)，Vol. 1, pp. 167-180, 2010。
- 4) 石川貴士，中園真人，内田唯史，岩本慎二，浮田正夫：小学校校歌にみる福岡の環境イメージ，環境システム研究，Vol. 21, pp. 257-263, 1993。

校章



地域の自然、印旛沼に浮かぶ船を円形で表わし、円周の稲穂は生産や学業の実りを、結び目は連帯と友情を表現している。

船穂小学校校歌

作詞 水野葉舟

作曲 鈴木竹松

一、もりはまもるぞ しずもりしげりて

われらの学校 われら子どもを

日本をきづく 土台石なる

われらにつよき 力をうえる

二、もりはまもるぞ しずもりしげりて

ぬまよりわきいずる ちち色のもや

水鳥なきて 夜明けとなれば

新しき日に 目ざめていさめと

三、もりはまもるぞ しずもりしげりて

もりの村なる われらの学校

われら子どもに いつわりなき

かがやくたましい そだてとまもる